

高橋 治



細君「ほんとに急なこつてしたなア……」

周吉「いやア……、氣のきかん奴でしたが、こんなことなら、生きとるうちに
もつと優しうしといてやりやアよがつたと思ひますよ……」

細君「……」

周吉「——一人になると急に目が永うなりますわい……」

細君「全くなア……、お寂しいこつてすなア……、と去つてゆく」

周吉「いやア……」

そして、ひとり海を眺め、思はず深い嘆息を洩らす。

一七四〥海

遠く島々通ひのボシ／＼、蒸気が行く。

一七五〥緑先

それをボシ／＼跳びてゐる周吉——

一七六〥海

ボシ／＼、蒸気の音が夏のやうに遠くなつてゆく。
片内、七月の午後である。

絢爛たる影絵

——小津安二郎——

三三

(終)

絢爛たる影絵——小津安二郎

高橋 治

文藝春秋

京子「どうもすみましエン」

紀子「（ズカズカしてやりなが顔してやりながら）——長いことお邪魔しちやつ

て、かりなが顔して東京へいらつしやいよ」

京子「いらつしいらつしいらつし東京へい歸りんなるん？」

紀子「お歸りんな今日お歸り

京子「さう、お歸りな今日お歸り……」

仕様がなしの

辨當たらお姉さんで手よ。云ひなれも、もう少しおつてくれてもよかつたと

思ふすもの」

紀子「やりや仕様がなしのよ。お仕事があるんだ」

京子「つたらお姉さんでもあるぢやありませんで云ふて、サツサと歸つてしも

うんですもの」

紀子「そりや仕様がなしのよ。お仕事があるんだから」

京子「だつたらお姉さんでもあるぢやありませんか。自分勝手なんよ」

紀子「でもねえ京子さん——」

京子「うん、お母さんが亡くなるとすぐお形見ほしいなんて、あたしお母さ

んの氣持考えたら、とても悲しうなつたわ。他人同志で（イラカ）……」

著者略歴

一九二九（昭和四）年、千葉市に生れる。旧制四高をへて、一九五三年、東京大学文学部国文科を卒業。同年、松竹大船撮影所に助監督として入社。一九六〇年より監督作品を発表し、並行して戯曲も発表。一九六五年、フリーとなる。一九七〇年より長篇小説「派兵」（五部作）を発表。主な作品に、映画「彼女だけが知っている」「獣の審判」（非情の男）、小説「派兵」（朝日新聞社）、戯曲集「告発・水俣病事件」（青雲書房）等がある。

絢爛たる影絵——小津安二郎——

一九八二年一月三〇日 第一刷

一九八四年二月五日 第六刷

定価一五〇〇円

著者——高橋 治 たかはし おさむ

発行者——西永達夫

発行所——株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—三 電話〇三六六五二二一（代）

印刷所——精興社

製本所——加藤製本

© Osamu Takahashi 1982 Printed in Japan

万一、落丁・乱丁の場合はお取り替えます

目次

第一部 春

5

第二部 夏

107

第三部 秋

199

あとがき

312

絢爛たる影絵——小津安二郎——

第一部

春

昭和二十八年の夏、松竹大船撮影所からの一通の電報が、北海道枝幸郡浜頓別町というところでもない旅先まで私を追って来た。母堂の急死で、最下位の助監督今村昌平が現場を離れた、代役として至急『東京物語』の小津組に参加せよとその電報は告げていた。

北海道への旅は旧知のある人を訪ねたもので、ゆくりない結果が生じかけていた。北見の国を東京につないでいる列車は、日に一本だったか二本だったか。いづれにせよ、ひどく時間がなかった。一、二時間の中に諸否を決めなければならない。地平の山の麓まで続くのではないかと思える藪萱草の野をその人と歩きながら、私は心を決めかねていた。

学生時代からの私を知る人だった。それだけに、その年四月、助監督として採用されたばかりの新入社員が、社命を拒むことなど考えもしなかったのだろう。去らずにいてほしいと思ってるに相違ない人が、しきりに帰れといい募った。

帰らずにすまず方法はあった。電報を社命だと考えたのは常人の感覚にすぎない。

……恋進行中乞御諒解。

……オリジナルシナリオのアイデア発酵中帰れぬ。代役の代役を探せ。

電報を打ち返せば、苦笑する人間はあっても、私を譴責する上司はなかった。というより、大船撮影所助監督室には組織の都合上演出課、演出部などの呼び方があったが、課長は勿論のこと部長も存在しなかった。直属上司が撮影所長であるのか、製作担当重役であるのか、副社長城戸四郎であるのか、その辺のことさえ明確ではなかった。時には京都所司代、時には幕府老中と適宜交渉相手を選び分ける新選組の如き組織が助監督室だった。

城戸は私たちによくこういった。

「君たちには監督になるための勉強をさせてやっている。本来なら授業料を貰いたところだ」
その独特の論理によるものだろう、私たちの初任給、六千円であった。大抵の企業では一万円を超えていた時代の話である。物作りは貧しさには耐えられる。しかし、自由を押し殺されれば死ぬ。このことを城戸は知っていたに違いない。安月給のかわりに、会社の幹部直結という誇りと、常識では理解し難いような自主性が与えられていた。この時の電報を打ったのも互選による幹事という名の世話役で、彼らは普通の会社の上司と違って強制権を持たなかった。

いったん撮影に入れば勤務時間は一切不定、その代り定勤は課せられない。幹事による仕事の指名を断れば、嫌味のひとつやふたつはいわれる。自分の代りに他の誰かが割を食う。だが、それで事はすんだ。入社以来半年足らずで、この奇妙な自律組織の中で生きのびるには、太々しくするより他に方法がないと私は見きわめた。でなければ、際限のない忙しさの中ですりきれる。

社命と考えた人にそれらのことを説明しなかったのは、助手をつとめる人が小津安二郎である

その一事によった。小津に関する神話的な逸話は入社以来数多く聞かされていた。いわば、その、生ける伝説が現場でどんな仕事ぶりを見せるのか。それを内側から見る事が出来る。確かに、ある期待が私を動かしていた。当時、一本の作品には四人から五人の助監督がつく。小津組にはチーフ以下一期先輩の今村まで、五人の常連助監督がきまっていた。誰かが欠けなければ入り込む余地がなかった。

その日、藪萱草の野で多くのことを告げぬままに、私は浜頓別を去る汽車に乗った。

小津との出会いの瞬間を私は覚えていない。野放図な組織であるだけに、大船の助監督には奇妙な几帳面さがある。それらが放埒はうちに流れることを僅かに救っていた。勿論、ある監督と助監督の初めての出会いもひどく折目正しい。それを覚えていないのは、その日起こったことのせいだろう。

上京して来た両親を長男長女が持て余し、原節子扮する次男の未亡人に一日のお守りを頼む。

東京見物を終え、彼女の隣室から借りて来た酒で笠智衆の父をもてなすアパートのセットだった。

「原さん、徳利が傾きすぎる。まだ盃一杯分しか酒をついでないんだ」

「あ、そうでしたわね、御免なさい」

原は小津に向って微笑み返した。小津は厳しい注意を出したままの顔を崩そうともしなかった。「じゃ、本番行って見ようか」

大声を出すわけではない。しかし、セツトは水を打ったように静まり返った。息を殺す出演者、

スタッフの動作が却って明確なある「音」に感じとれる。

その様がひどく意外だった。

仁王立になる監督、畏怖させる声を張り上げる監督、殊更大形おおぎように動いて見せる監督、そんな姿を見なれていた。それらの人々にくらべて小津はいかにも異質だった。巨匠と呼ばれて久しく、しかもどこにいてもひと眼でその存在がわかる巨体である。大船の助監督が「先生」と呼ぶ監督は小津一人だった。先生と呼ばれる人はステージが割れそうな声を出してもおかしくはない。だが、本番を告げる小津の口調には特に改まったものはなかった。そんな様を見て、受けとる側が意外に思うだけの話なのだが、笠は小刻みに震えていた。東山千栄子、原、二人の肩が反射的に硬直した。

「はい、では……ホンバン参ります」

わざと間を外したようなノンビリした声が小津に応じた。長年コンビを組んでいるカメラマンの厚田雄春である。意識的に三枚目を演ずることで緊張をはぐす。厚田のその辺の息は絶妙だった。

映画の現場の仕事には、一種いいようなない間がある。

監督が本番を指示する。助監督が復唱する。撮影、照明、録音、技師の名で呼ばれる各部門の責任者がその復唱を確認する。

「はい、本番ッ」

再び監督の声がかかる。

第一部

「トラックナンバー××。カットナンバー△△」

カチンコを叩く最下位の助監督はカメラの前に出ながら、録音、撮影両種のための編集用の番号を叫ぶ。当時、別なブースにいてステージから見えない録音技師妹尾芳三郎の確認はブザーの音で戻って来る。これらは一種儀式にも似た手順であった。

俳優の額に浮いた汗を押える。気づかなかった道具の不備を正す。そんな些細な中断があっても、儀式的の順は元に戻る。儀式である以上、進行させる側は形だけでなく完璧な内容を要求される。いわゆるNGは演技者に許されるものであって、スタッフがそれをおかすことは嫌われる。しかも、流れを乱してはならない。

だが、その日、私は流れに乗れなかった。小津組の雰囲気にも馴れなかったせいもある。小津の妙に静かな声に気圧^{けあ}されてもいた。笠、東山、原と三人の超一流演技者の異常な緊張を眼のあたりにしたせいでもあったろうか。

間を外し、私は一瞬立ちすくんだ。ステージの土間にじかに敷いた薄べりの上で巨体を屈め、小津は低く構えたカメラのファインダーを覗いていた。その小津が私を見た。わずかに顎が動いた。一時に頭に血がのぼった。人を顎で使う気か。そう思いながらも、習慣的な声を上げた。

「本番参ります。トラックナンバー……。カットナンバー……。」「カメラの前に出た。」

「よいい、……はいッ!!」

低い、見事に通る声だった。

カチンコを叩く。小さな黒板の文字と、その上の白黒に染め分けられた拍子木が合わされた瞬間がフィルムにうつれば良い。当時は録音テープなどなかった。拍子木の音も、以下の科白せりふも光学的に音ネガに録音される。その拍子木の音を画面に合わせれば科白は喋る口の動きに同調する。カメラと録音機は同速で廻っているからだ。助監督の手や体は画面から早く消えるに越したことはない。僅かでも齣数の節約になる。松竹の仕付けはそんな細かなことにも厳しかった。

叩いた。カメラの視野から逃げる。思いもかけず引足が凄い音を立てた。土間に置かれたブリキ缶の灰皿を蹴ぞうとばしたのだった。

「高橋、靴、ぬげ、草履ぞうりにはきかえろ」

巨体がそのまま襲いかかって来るような大音声だった。奇蹟のような早さで草履が眼の前に出された。誰かが脱いで出したのだ。見届けて、小津が再び低い声に戻った。

「本番」

「トラックナンバー……」

自分が出したNGのために録音番号をひとつ送る。黒板の字を書き直しながら叫んだ。屈辱に声は震えていただろう。缶との距離を見定めてカメラの前に出た。

「よいい、はいッ」

見計らっておいた分、今度は、正確に引足を運び、その足で、したたかにブリキ缶を蹴り倒した。私は狙いすましたのだ。草履の足は靴よりも烈しい音を立てた。

新人助監督の造反に誰もが呆氣にとられたらしい。暫くは物をいう人もなかった。

その日、ステージを出ると、とつくに帰ったはずの小津がステージドアの前で煙草を喫っていた。

「お疲れ様です」

誰かを待つのかと思い、声をかけて通りすぎようとした。

「高橋」

呼びとめておいて、小津は並んで歩き出した。

「なかなかの度胸だな。……え？」

小津の微笑は優しかった。わだかまりを吸い取るようなものをたたえていた。勿論、浜頓別から戻った私なりの意味を小津は知らない。怒鳴ったことだけが頭にあったのだろう。だが、藪萱草の原野から自分を引き離して来ただけの意味に似たものを漠と感じた。

「草履をはくのは嫌か」

「靴も草履も缶を蹴とばせば同じじゃないですか」

「理窟も達者だな」

「セットには背広で出たいと思ってます。でも、一年目だけは走り使いで我慢します」

小津は声を上げて笑った。

「背広か……。それも良いが、俺の組では目立つよ」

「良いんです、小津組はこれ一本きりですから」

「一本きり？……何故だ」

「何本ついても同じじゃないですか。なにかも小津さんがやるんですから」

小津は又明るい笑い声を上げた。

「でもな、お前のこと頼まれてるぜ、牛原先生から」

「え？」

絶句した。

牛原虚彦。小山内薫の直弟子である。牛原は学士監督第一号と呼ばれるように、当時は珍しい東大出身で、ハリウッドに留学しチャップリンに映画を学んだ。頑健な体を見込まれ、重いカメラを担ぐ撮影助手に任命された小津を、監督の道に進ませた陰には牛原の援助と指導があった。これと思う外国映画が輸入されると、牛原がそのコンティニューティを全部船出に投げるあの紙テープにうつしとって来る。各カットの長さまで忠実に記録したこのテープをほどこながら牛原は映画を語った。彼をとりまくグループで最も鋭い質問を投げかけるのが小津だった。牛原が小津に助監督への転進をすすめたのはこのことによる。それを偉とした小津は終生牛原を師と呼んだ。八十五歳の現在でも、映画を語られば、青年のような情熱が牛原の老軀から迸る。

私が小津に会った頃、牛原は大映に所属していた。監督としての第一線を引きつつあったが、当時の映画界きっての国際人として、牛原が果していた役割は大きかった。その牛原に私は旧制高校の時代から私的な面で指導を受けていたのだ。

私をあの別れ道から呼び戻したのは、助監督室幹事ではなく、小津自身だったのだ。

「まあ良い。わからんでもない。踏み台にしやすい師匠を見つけるのも、この社会で生きるひと